

9 漁業管理の取り組み

★環境保全

Q 漁場の保全・管理の現状とは？

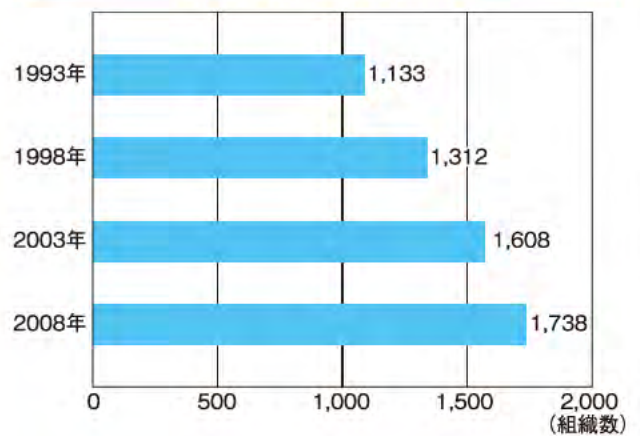
継続的に漁業を進めていくために、漁場の保全・管理は大変に重要になっています。世界的な自然環境の変化や乱獲などにより、資源量が減少してきているものも見受けられます。そこで、漁業にたずさわられる人たちが自主的に、藻場・干潟の再生活動など、漁場の保全・造成などをする動きも見られます。

そのほかにも、漁場利用の取決めをしたり、漁場の監視、植樹活動、魚つき林の造成などが行われています。

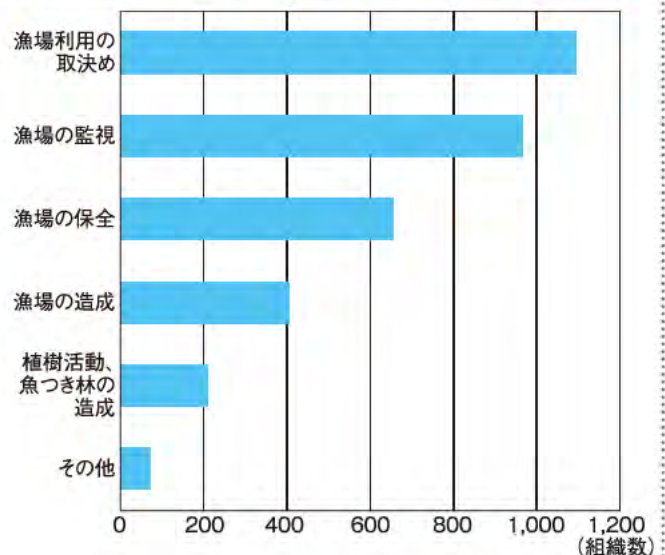
そうした活動をする漁業管理組織の数は1,738あり、2003年より13.4%増加しています。



漁業管理組織数の推移



漁場の保全・管理を行った組織数



農林水産省「漁業センサス」

コラム 藻場・干潟の再生活動とは？

藻場は、水産物の産卵や稚魚の成育の場です。しかし、水温上昇に伴い海藻が減少し、そこに海藻を食べる生物が影響を及ぼすことにより、無節サンゴモという殻状の海藻の生息が持続する「磯焼け」が発生しています。


国では、磯焼けの原因の特定と具体的な対応策をまとめた「磯焼け対策ガイドライン」を策定し、その普及を図るとともに、海藻が着定しやすい基質を設置して藻場の造成に取り組んでいます。また、地元の漁業者が中心となって、海藻を食べるウニを駆除するなどの保全活動を行い、藻場を回復するなどの成功事例も出てきています。

★資源保全

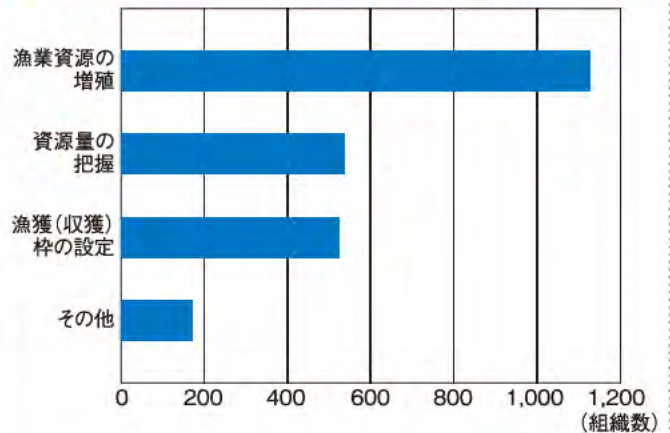
Q 資源管理における活動とは？

漁業資源は、環境保全により守ると同時に、漁獲量を制限するなどの「資源保全」策もしっかりと行わなければ守ることができません。漁業管理組織では、「資源量の把握」「漁獲(収獲)枠の設定」「漁業資源の増殖」などの活動を行っています。また、直接的な「漁獲の管理」として、「漁期の規制」「漁法の規制」など、様々な規制を設けることで、獲れる魚の数を制限して保全しようとしています。

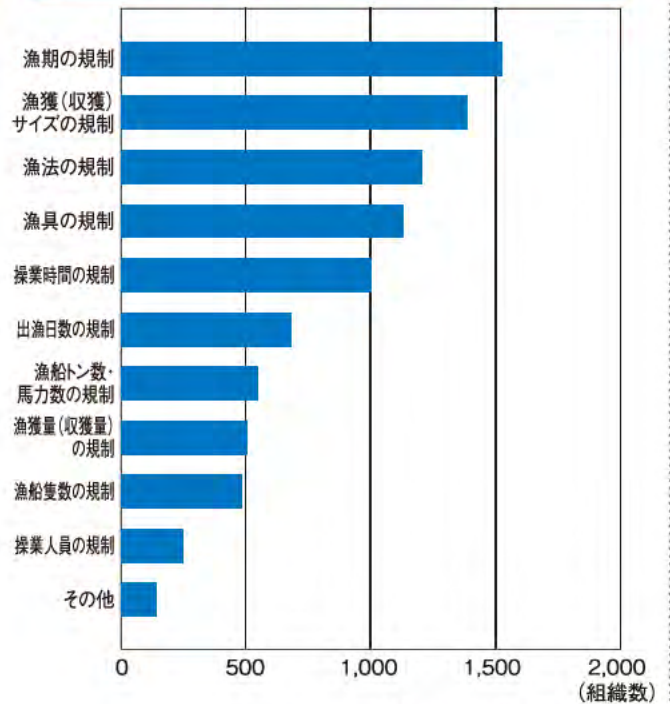
漁期・漁獲サイズの規制

種類	禁止期間	禁止サイズ
●●●●	△月△日 ∩ △月△日	 ○○cm以下

漁業資源の管理を行った組織数



漁獲の管理を行った組織数



農林水産省「漁業センサス」

成功事例：秋田県が「県の魚」ハタハタの資源回復に成功

日本海で獲れるハタハタは、秋田の食文化と密着した、地域の重要な水産物です。ところが昭和58年ごろからほとんど獲れなくなり、秋田県では3年間(平成4~7年)の禁漁を実施し、藻場造成や稚魚の放流を行いました。その結果、資源が増加し、この取組は資源回復の成功事例として、広く知られるようになりました。資源回復後も、秋田県では厳しい資源管理を行い、ハタハタの漁獲量確保に努めています。

資料：平成20年版水産白書より



ハタハタ